

た。喜んだ源工門は、子供に家で夕飯をたべていくようにいうと、だまったまま、子供は下の小川へおりて行きました。

そして、しばらくの間、源工門は子供を

まちました。しかし、いつまでたっても、

もどつてこないの、下の小川へ行く、

子供の姿はみあたりませんでした。源工門

は、それでは小川にそつてたてである、地

蔵堂であそんでいるにちがいないと、中に入つていくと、泥のついた足あとが床にあ

り、地蔵さまの足は、泥土でドロドロによごれていました。また、その顔は、さきほ

どの子供の顔とそっくりでした。

源工門は、この五月のいそがしいときに、たったひとりで仕事をしている、自分を

あわれにおぼしめしめくださって、地蔵さまがお助けになったにちがいないと、床にひ

